■今月の特選句

2022年7月

欲しいのは地球にかざす日傘です

岡田廣江

地球温暖化をなんとかせにゃいかん。なあに酷暑なら日傘をさせばいい。地球サイズを作るには知恵を必死に絞らにゃならんが地球は涼しい顔。

透明な線を描いて燕とぶ

上山美穂

人間に大切なのは想像力。見えないものを見、聞こえないものを聞きとる力である。燕が飛べば透明な軌跡ができ、すいいという音もたっている。

新聞を読むのが仕事梅雨に入る

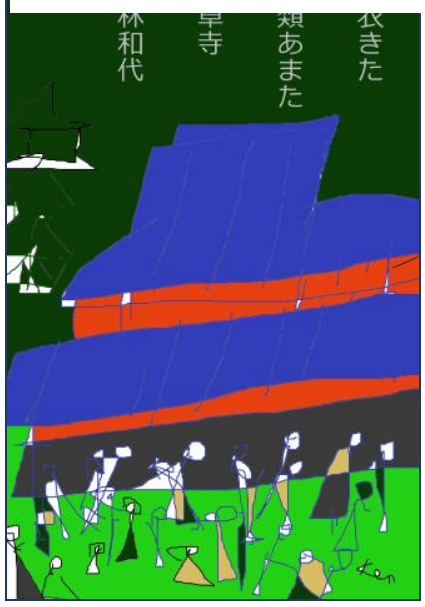
高橋きのこ

そもそも晴れていてもする事がないが、こう雨ばっかりだと出かけるのも面倒だ。日々の暮らしで新しくなるのは新聞だけ。今日も仕事するか。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の特選句

2022年7月



浴衣きた人類あまた浅草寺

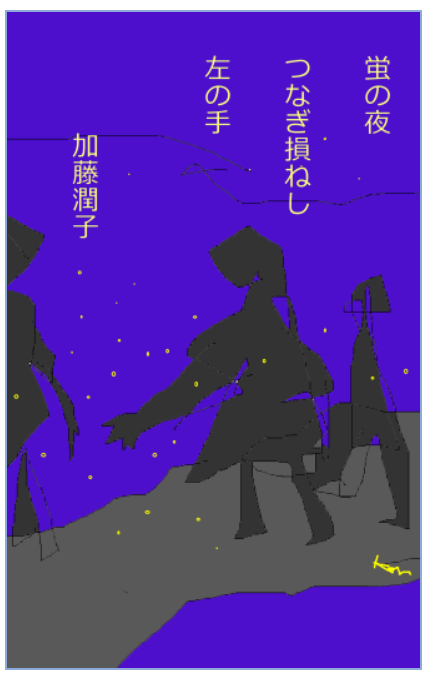
大林和代

このところコロナも落ち着いてきて、浅草寺にも観光客が戻ってきたね。海外から多くの人が来るところだが、仏様の世界に人類がうろついている。

人間に賞味期限や冷奴

小林英昭

冷奴は冷たいうちが賞味期限。冷たさイコール旨さでもある。一生どころか人類も、宇宙の歴史からすれば豆腐が冷えている間程度のことさ。



蛍の夜つなぎ損ねし左の手

加藤潤子

この状況は恋人同士でしょうなあ。狭い橋や石の上を渡る時、それとなく手をつなげそうな場面はあるのだが、左手はスタンバイしたままだった。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

大海に溺れるごとし風呂の蟻　赤瀬川至安
・・・井の中にいる蛙に似たり

重力に負けず山より夏の月　稲沢進一
・・・尻の重くてどつこいこらしよ

写真撮る以外のことをしたき薔薇　伊藤浩睦
・・・絵を描く術の無きを恥じをり

口紅をひきたくなるよな五月晴　梅野光子
・・・おめかしをして美味しいランチを

無防備の寝相を晒す熱帯夜　青木輝子
・・・ひとり寝ならば遠慮は無用

立ち話合いの手入れる時鳥　井野ひろみ
・・・人語のわかる賢い鳥よ

昼顔に内緒のメール覗かるる　久松久子
・・・カーテン閉めておけばよかつた

十薬の白包帯と同じ色　日根野聖子
・・・清潔感がどちらも大事で

個人情報我にはあらず五月闇　金城正則
・・・インターネットの闇も恐れず

すれ違ふ人さけるかに白日傘　井口夏子
・・・話の長い人は厄介

梅雨最中今夜も愚痴の聞き役に　小笠原満喜恵
・・・愚痴も噂も大好物よ

私を包む薔薇の香りのオブラート　山田真佐子
・・・苦い思いもそつと包むや

海原の端をくすぐり汐干狩　南とんぼ
・・・波が笑えば人が尻餅

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

乱雑に並びし曝書を拾ひ読む	相原共良
ほうたるの好きな甘さの水かとも	相原共良
ハンカチの秘密をそつと畳みけり	相原共良
三社祭猫も杓子もはっちゃける	青木輝子
ばばどちのマシンガントーク蝉時雨	青木輝子
変顔に夏の近づく黒マスク	赤瀬川至安
老鶯の百点満点ホーホケキョ	赤瀬川至安
虹を見る眼に虹彩のありにけり	荒井　類
谷崎の墓に寂の字眼細鳴く	荒井　類
夏草や兵(つはもの)どもがウクライナ	荒井　類
朝顔や千円カットの古き椅子	井口夏子
沢蟹の泡ふくさまをあはれみぬ	井口夏子
墓標なき墓に万骨枯れる花	池田亮二
住所不定無芸大食の猫も恋	池田亮二
余るほどまた撒く夫や野菜種	石塚柚彩
六月三日父の忌日に叔父も逝く	石塚柚彩
笊抱へ爺の畑の苺狩り	石塚柚彩
人の世や金の切れ目の麦こがし	伊藤浩睦
千三つの勧誘の立つ梅雨晴間	伊藤浩睦
掃除機の倒れてゐたり夕薄暑	稲沢進一
大空のかくもまばゆきしやぼん玉	稲沢進一
捩花の解けぬままをよしとする	稲葉純子
蝸牛アンテナ張るもきりもなし	稲葉純子
図書館は居眠りの場所夏休み	稲葉純子
子と交渉や草取の時間給	井野ひろみ
燕の子体の半分ほどの口	井野ひろみ
アイスティー氷のカランコロンかな	上山美穂
玉葱を刻む鬼の目に涙	上山美穂
すいすいと燕の親子水揺らす	梅野光子
トンネルをぬければ青い海の夏	梅野光子
海の日や電気自動車すいと行く	遠藤真太郎
硬水で顔を洗えと山開き	遠藤真太郎
レシートの最後に記載のラムネかな	遠藤真太郎
亀鳴いて時の流れをとめてみよ	大林和代
久々の神輿も人も浅草に	大林和代
奥入瀬に水湧き出でて青時雨	小笠原満喜恵
空豆の匂ひ懐かし指を嗅ぐ	小笠原満喜恵

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

蝙蝠でミサイル防衛できまいか	岡田廣江
老鶯の一分間の発表会	岡田廣江
アクリル板に映り華やぐ薔薇の花	加藤潤子
おにぎりの横ににつこりさくらんぼ	加藤潤子
桃源郷国旗は三色菫かな	北熊紀生
馬肥ゆるよくぞ支へり足の蹠(あしのうら)	北熊紀生
すき間から世間をのぞく新芽かな	木村　浩
まず幹に挨拶をして新芽かな	木村　浩
野良ネコも急ぎ足なる梅雨の中	金城正則
アメンボの浮かぶ数だけ静寂がある	金城正則
亀鳴くやピラミッドの下の段	久我正明
亀鳴くや選挙結果の異常泣き	久我正明
坂登るヒーフハーフと亀が鳴く	久我正明
真似事の早乙女締むる赤襷	工藤泰子
角と色褒めヘラクレスオオカブト	工藤泰子
マシュマロの木よ森青蛙産卵す	工藤泰子
リラ冷のやうに散弾銃の跡	桑田愛子
万緑や電動鋸を唸らせる	桑田愛子
蟻の行軍夏蝶の羽を帆に	桑田愛子
長屋にはもれなくついてくる極暑	小林英昭
蟻の列伝言ゲームしてをりぬ	小林英昭
蝶のきてこそばゆき葱坊主かな	壽命秀次
鯉のぼり風はビミびみ美味らしい	壽命秀次
顔役の重要アイテムサングラス	壽命秀次
葉桜や早くも遅刻の常習犯	白井道義
控へ目に三個たいらげ柏餅	白井道義
泳法は自由自在やこいのぼり	白井道義
捨てられずまた押し込むや更衣	鈴鹿洋子
図書館の行きつく席の窓若葉	鈴鹿洋子
うふっ豌豆の花もうふふふ	鈴木和枝
人間界に戦車はいらない桜通り	鈴木和枝
灰汁とりの灰見つからぬ蕗蕨	鈴木和枝
一年生代返覚え四月尽	髙田敏男
居合師や手打ちにすると冷素麺	髙田敏男
溝浚へ目高の学校休校す	髙田敏男
私の耐用年数いくばく梅雨に入る	高橋きのこ
む！む！！六月六日梅雨宣言	高橋きのこ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

忠実さ自慢の翁の豆御飯	竹下和宏
朝帰りの嫁見逃さぬ守宮かな	竹下和宏
十薬の子どもふやさむもう一つ	竹下和宏
人間は理解できぬと若葉風	田中　勇
若葉風人間に出来ること出来ぬこと	田中　勇
無限なる可能性追ふ若葉風	田中　勇
質草にもならぬ女房初鰹	田中早苗
親竹を見下ろしてゐる今年竹	田中早苗
戦闘の続く彼の地にひまはりを	田中早苗
十薬を煎じてもらふ腐れ縁	田中やすあき
覆面の馬駆け巡る夏の原	田中やすあき
紫陽花や犬に不服の雨合羽	田中やすあき
都庁舎は下界の青葉を見下ろせり	谷本　宴
十薬や毒か薬か決めてくれ	谷本　宴
くせつ毛がますますくるり梅雨の入り	谷本　宴
「かちわり」を漢字で書けと言はれても	田村米生
夏大根擂れば機嫌のわかる妻	田村米生
吾に住む鬼の好物冷し酒	田村米生
白き根を断つも十薬また咲きぬ	月城花風
塩加減海女は舌より肌で知り	月城花風
いつ果てるともなき宴火取虫	月城花風
辣韮の文字のもじもじしているよ	土屋泰山
夏場所をひとり稽古のアナウンサー	土屋泰山
スカイツリーからも新緑がパセリほど	土屋泰山
女王は九十六歳聖五月	飛田正勝
父の日や父の背に乗る怒り肩	飛田正勝
父の日の父最後までグーを出す	飛田正勝
家を捨て我が家に来たか蛞蝓	長井知則
零れ陽に淡く色づく額の花	長井知則
オリーブの花次々に散り積もり	長井知則
ボランティア斑猫の道案内をお手本に	花岡直樹
梅雨空に悩みはなにと聞いてみる	花岡直樹
自粛緩和の予感でうごめくビアの泡	花岡直樹
空豆の炭火焼きですお父さん	浜田イツミ
短足の座高測定昭和の日	浜田イツミ
椎の花大仰に山盛りあげて	浜田イツミ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

草刈のモーター止んでジャズ流れ	久松久子
甲冑に侍るこの世の蚊遣香	久松久子
紺のリボンをゆる結びして花菖蒲	日根野聖子
白く咲き白く生きむと花みかん	日根野聖子
うすものに肥満の体縮めたる	廣田弘子
朝昼晩着るもの変える梅雨はじめ	廣田弘子
咳ひとつこらえてバスは終点に	廣田弘子
初夏の風背負って走るランドセル	細川岩男
葉桜や見え隠れする陽射しかな	細川岩男
万緑を掻き集めてや空に敷く	細川岩男
新緑の恥じらい失せて山猛る	南とんぼ
原石の磨かれぬまま梅雨に入る	南とんぼ
我が血吸ひ易々打たる酔ひどれ蚊	峰崎成規
海月知るや人に浮世のあることを	峰崎成規
紙魚の喰ふ画賛の俳句切字なし	峰崎成規
噛みつかるるジッパーどこか亀が鳴く	椋本望生
万緑や腰でジーンズはきこなし	椋本望生
伸びきつて亀の首より初夏の風	椋本望生
羅の片ひざ立てる女かな	村松道夫
双手(もろて)挙げ木木の喜び青嵐	村松道夫
冷奴妻居ぬ宵の馳走かな	村松道夫
わらび餅きな粉がのどで通せんぼ	森岡香代子
オープニングはドーンといこうザ・かわず	森岡香代子
帰省子にあんた誰ぞとおばあちやん	森岡香代子
乱鶯の三部合唱四部合唱	八木　健
噴水は吹き出し笑ひしてをりぬ	八木　健
毛虫の毛専守防衛しておりぬ	八木　健
分身の術は不首尾で蛇の衣	八塚一青
一匹で一家揺るがす油虫	八塚一青
髪結えば塩素の香る小暑かな	八塚一青
煙に巻く話肴にキャンプの火	柳　紅生
押し売りを軽くあしらふ金魚の尾	柳　紅生
宇宙への省エネ旅行半仙戯	柳　紅生
むらさきはセレブの色香桐の花	柳村光寛
森を出てシティーボーイの鴉の子	柳村光寛
父は子の子は母のもの夏休み	柳村光寛
干からびてなほ鮮やかに紅の花	山内　更
植木鉢が君の世界か雨蛙	山内　更

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

父の日や湧き水ほとばしるを汲む	山岡純子
チョコレート色のコスモス風甘し	山岡純子
蝸牛待たされた子はふくれっ面	山岡純子
そら豆の過剰包装されており	山下正純
虫よけの袋をかければ枇杷包子(ほうし)	山下正純
買い取りて流してもよし初夏の風	山下正純
出る時はこの窓からよ子雀さん	山田真佐子
蛍の夜ここに光ればあそこにも	山田真佐子
その昔大山街道瓜の花	山本　賜
配色はピンクと緑苔の花	山本　賜
住む人の思いのままの薔薇の庭	山本　賜
田おこしの機械の音や目借時	横山洋子
草取りの日除けに背負ふ夏帽子	横山洋子
泡といふ空気好みのビール党	横山洋子
懐かしい声はあのひと蛍狩	吉川正紀子
大男コバエごときに腹をたて	吉川正紀子
夏座敷猫に欠伸をうつされて	吉川正紀子
炎昼やのめりこんでる軍用車	吉原瑞雲
自戒ややゆるびて冷酒二合ほど	吉原瑞雲
コロナ明け祭囃子のはずみけり	吉原瑞雲
子燕の巣立のこぼれさうにして	渡部美香
文献を崩して積めば明易し	渡部美香
地下足袋のまま縁先の心太	渡部美香
三姉妹保険の話になる五月	和田のり子
衣だけ変はらぬ若さ更衣	和田のり子
茉莉花が零す白さよ母の影	和田のり子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。